
翁な青年の異世界冒険記

亜狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翁な青年の異世界冒険記

【Nコード】

N5145Z

【作者名】

亜狸

【あらすじ】

97歳でこの世を去った老人が、死後の世界の主に頼まれ異世界へと旅立つ、老人には新たな体があたえられ、異世界ライフをのんびり、ゆっくり冒険していくお話。

作者はド素人で文才もありません。拙い文章ではありますが宜しくお願ひします。誤字、脱字多いと思しますので、先に謝っておきます。

1話 旅立ち

近畿地方の南部に位置する片田舎で、一人の男が天寿を全うしようとしていた。

彼の名前は中野 喜三郎、江戸時代から続く、剣術道場の38代目の主であり、世間では『最後の武士』などと呼ばれる程の人物である。

「思えばわしの人生、中々に楽しいものじゃったのう・・・」

道場については、お主に任せるからの、好きにすればいいわい」

喜三郎がそう言っていると、彼の孫である孝彦が頷き、

「わかった、じいちゃん。あつちで婆ちゃんに会ったら宜しく言っとして」

孫がそう答えるのを見ると、喜三郎は嬉しそうに微笑むと静かに息を引き取った。

多くの門下生と、彼のただ一人の血縁者である孝彦は涙を我慢し、笑顔で『最後の武士』中野喜三郎の旅立ちを見送った。

「ここは、三途の河かの？」

喜三郎は、周囲を観察し、そう呟いた。

周囲には、この世のものとは思えないほど綺麗な花畑が地平線まで続いており、目の前には美しく大きな河があった。

河原には、泣きながら石を積んでいる小さい子供達、河を渡している船の周りに暗い顔をした人々が船に乗る順番待ちをしている。

「まさしく、といった感じじゃの、じゃあ、わしも渡し船に乗らんとぅ。」

我が愛しの婆さんがきつと待っていてくれるじゃろって

すると背後から、

「あの一・・・」

と、若い女性の声が聞こえ振り返ってみると、そこには神々しい程の美しさの銀髪、銀目で綺麗な花柄の入った和服を着た少女が美しい笑みを浮かべ佇んでいた。

「ふむ、なにかの？」

喜三郎が答えると、銀髪の少女は用件を伝えようと口を開いた。

「中野 喜三郎様ですね？ 我が主が喜三郎様に伝えたい事があるとの事で、一緒に来て頂けません か？ 私はこの『旅立ちの河』の管理人の花瑠璃と申します。

『旅立ちの河』とは、喜三郎様の国で言うところの三途の河にあたります」

花瑠璃が用件を伝えると喜三郎はやはり三途の河じゃったかと、納得した面持ちで返事をした。

「ふむ。此処の管理人の主となると、非常に身分の高い存在ではないのかのう？ そのような存在がわ しに何のようなのかの？」

「そうですね、こちらの死後の世界では最も身分の高い方となりますね。 喜三郎様の生前の輝かしい 功績を見込んで、主が直にお伝えしたい事があるとの事なので、ご協力下さいますようお願いします」

「輝かしい功績のう・・・」

まあ、そのような身分のものに招かれては、行くしかないのう。わしとしては、早く愛する婆さんに会いたいのが・・・」

「ご協力感謝します。 それでは私の船で、ご案内いたしますね」

花瑠璃は笑顔でそう返すと、少し落ち込んだ顔の老人の手をとり自分の専用の船へと案内した。

1話 旅立ち（後書き）

小説を読んでいくうちにどうしても書いてみたくなりました。拙い作品ですが、お付き合いして下さいると嬉しいです

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽（前書き）

なぜか謎の空白が出来るのはなんでだろう・・・

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽

喜三郎は花瑠璃の船に揺られながら、周りを漂う他の船に視線を向けていた。

「のう、花瑠璃さん、あれらの船は何処に行くのかのう？」

喜三郎の乗っている船は白いクルーザーのような大きな船で内装も見事なものであるのに対し、喜三郎が視線を向けている船は、真っ黒な小さな船であった為、疑問に思った喜三郎は花瑠璃に質問をしていた。

「あの黒い船は喜三郎様方で言う所の地獄へ向かう船になりますね」

花瑠璃は穏やかな笑みを浮かべたままそう告げると、説明を続けた。

「死者は生前の行いによって、行き先が変わるのですが、船の色はそういった行き先によって分けられています。『黒』は地獄へ償いに行き、『青』は転生をする為、『白』は天の国へ昇る為の船になります」

「ふむ、ならわしは天国へ行ける、と言う事が、婆さんもいたら良いのう……」

「いえ……この船は白、と言っても特別なもので主が直接招待した方しか乗る事は出来ません。」

行き先は、主の宮殿に直接つながっております」

「ふむふむ、婆さんに会えるのはまだ先の事になるのかの……」

残念そうな顔をした喜三郎に、花瑠璃は暗い顔をして口を開いた。

「あのう……申し上げにくいのですが……」

花瑠璃が何やら申し訳なさそうな顔をしている事に気づいた喜三郎

「奥様は……その……既に転生されているんです……」

喜三郎は暫くその言葉を飲み込めず、頭の中でその言葉を繰り返していた。そして、ようやくその言葉の意味に気づいた喜三郎は絶句した。

「なん……じゃと、では婆さんには会えんのか……」

花瑠璃がさらに言葉を続けようとした瞬間、喜三郎は周囲にあつた青い船に向かって跳躍し・・・ようとして花瑠璃に羽交い絞めにされた。

「ええい！離せ！離さぬか！！わしは婆さんの所に行くのじゃ！！」

「駄目です！あの船へのつたからとて奥様の所へ行けると限つたわけではありませんし、それに奥様は、すでに転生先で結婚されてます！！」

花瑠璃から告げられた衝撃の事実絶句する喜三郎、

「そんな・・・婆さん・・・生まれ変わっても一緒になろうと近いあつた仲じゃつたのに・・・」

年甲斐もなく涙を流しながら声にならぬ声を出しながら嗚咽していた喜三郎を余所に船は目的地に近づきつつあつたのだが、涙を流しながら周囲まで暗くなっている、喜三郎に花瑠璃は声をかけれずにいたのであつた。

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽（後書き）

何から何まで初心者な挙句、国語力なかったのも思い出しました。不快に感じた方の為この場で先に土下座しておきます。

3話 死後の世界の女王（前書き）

おおお、いきなり評価して下さいる事に感激いたしましたW
有難うございます！！

3話 死後の世界の女王

死後の世界の主である女王の宮殿で、喜三郎と花瑠璃は、宮殿の主を待っていた。

先程まで黒いどんよりとしたオーラを放ちながらブツブツと「ばあさんや・・・ばあさんや・・・」

と、女王を待つように通された部屋の片隅で呟いていた喜三郎も何とか持ち直した様子で、今は落ち着いた表情で、花瑠璃の対面のソファに腰を下ろしている。

「して、花瑠璃さんの主とは、どんな方なのですかな？」

喜三郎は、やや待ちくたびれた、という顔で花瑠璃に問いかけた。

「私の主は、上位の神で、この死後の世界を統べる女王『アリア』様と言う方で、非常に、お優しく、美しい方ですよ」

自らの主を誇らしげな顔で説明をする花瑠璃、すると部屋の扉の方向から、少し照れたような声がした。

「花瑠璃、身内をあまり褒めるものではありませんよ」

花瑠璃は、エヘへと照れた笑みを浮かべ、イスから立ち上がり女

王に丁寧にお辞儀し、

「申し訳ありません、女王様」

と、ニコニコ笑いながら謝罪した。

喜三郎も、イスから立ち上がり女王の方へ向き、お辞儀する。

「どうも始めまして、花瑠璃の上司で、この死後の世界の女王を勤めさせて頂いているアリアと申します。以後お見知りおきを」

高い身分の神が、ただの人間の老人である喜三郎に丁寧な言葉使いで接して来たことに喜三郎は少し驚いた、喜三郎が今まで出会ってきた、高い身分の人間は碌なものでもなかったからである。

「これは、ご丁寧に有難う御座います、女王殿下、とお呼びすれば、宜しいですかのう?」

「そんなに、改まった態度でなくて結構ですよ、気軽にアリア、とでもお呼び下さい」

「ふむ、そうですね?それではアリア殿、と呼ばせて頂きますよう。」

して、アリア殿はこのような老いばれに何か御用ですかの?」

アリア殿、と呼ばれる事に、少し満足そうな笑みを浮かべていた女王は、本題を切り出した。

「そうですね、それでは立ち話もなんですので、どうぞ、お掛け下さい」

そういつと女王は、喜三郎の正面に腰を降ろした。
すなわち花瑠璃の隣であったのだが、当の花瑠璃は、よほど女王に心酔しているのか、何やら自分の世界に入り、ブツブツと何かを呟いている。

一人の世界に浸っている花瑠璃を見て少し照れたように苦笑いをし、女王は話だした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145z/>

翁な青年の異世界冒険記

2011年12月18日09時55分発行